

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

JAPAN

TAMA



八 13

1825

卷 1



序

誠より悔ひを慮ふを怨む
忍ふを辱すを憤るを嘲この樂
公を歌ひ日くも憂ひを少すれど下を走
易き國すれどすかと行ひ難と宣ひ
聖人の教を天下國家を治らう
み行狀を脩るのをすり女子も之を人せ
いはるつを乞うづづくび古人の頃す胸中

松下水流藏書



アマリの徒子位半身のきく宮殿の内ト
塵器をとあつてゐる黒ぢく便せよ大和小學女
大學などへの道をやうげ物は車もあり車を駕
も駕たゞハ如意を繪畫繪計を勾絵を藝
もとよりあ親のゆ件まで駕ひ是へ成長は
は他の家子嫁一女は侍する附親の恩を知りて
車を尊むとは珍物物理乎用やあるみ善
み善すのみが身ひと列もとよりてとも

男て少ぬ徳一矢は同之あり初よりの多白
氣のとく深り而もさきのちれば後初の事も
不善の體をとてのちのれ害惡邪正の報のと
りうらを是すと一善善と自悪と恨み
車とせば貴賤の差引をありとて世路を歩に
易うるべされど兒女をおひし國事の文中
え女今川と称す參り今川不復の後も御
朝すちどり之婦女の教訓ふゆるあゝのを教く

何の事かを説いて聞かれて
世行され兒女の事と如きを聽て之に
物の名をうながす仰つたけ 小説も亦何の
事すらこれも更代もねど童蒙をお爲ん
度彼の前より次第に今小説ゆく誠
草紙されども終り未だの名を肩へ漁
徑道教訓女如何と題一 懸念をともす、源
翁成門一と云ふ直一 その子本多あら茎と

如き孝節をもつて

記すとの事

月陰会主人
馬秋





徳源清今川卷之一

第一回

明治四十一年七月一日

執行弘道

氏寄贈

古
人有謂夫妻猶如瓦上人のかけ合ひ事云々言
ことぢつゝ又人の妻とてありの丈婦の事よ
りも猶す人の草木是より初ぢう後一大事是
とあす事あすされど大極兩儀を生ト而後
陰陽を生ト陰陽丈婦を生す丈婦初づ親
えずもあく成丈ノ子枝葉をかけしとす



のこなとれまへりとは人の道の根本これこそ
始よりともゆく詩も國雅とかひむかうをへ雲づ
れ神祇をもくらへまくとせんかは男女の
道を人間の事とすて喻ひのほど醒き三平ニ満す
よと津をもくらへるううがううがうとつ支ぢ
有のゆゑと男を女の義とすて迷ふ筋を妻をも
外子乞を通ひてすむもくとふくのれあら
男を前へ天すて女に地よひくねうあら
のあみどりて草木化けきる所理ぢれ、女
男すあひきく捺らひくとく神祇の名をすく、う
天の御受、あひぎらがきを家子國初の國事町通
の萬葉を、や國事町通といふ、人子は二人、あつたを
清七姓をかまひといひて二人をさへりやさず
幼く妹をあひ、さくまつてのうすあひ、婆娘を
孫海棠を二ツちうべたら、是室若翁也
をかのうすへやくまほいまくまでた家のあれ

さるよもやつやつのみ因縁父母のてふあひの
がわせく急所の處むけにうへて縦糸にせすと
あきなすれど一縄かとすお生れみて父母のま
返自らであらゆるゆきをうき、始めていと
あきなめり出店の嫁さんと約束して商氣
十すとある度の急所の支度するふ、是後
やや間あやとへうとうきのうとくぶす中
小わづらといひてが登のるあたす候てやつて
何もえのこちませんとせんとおたひが、父母の
急所の急所をつちへ津波の心をひきへ
まくやがまくらさんちよかはとむづきと
お氣づきませんとおとせんとれどと
おさんぐる面うでたまひのふがゆうじけるの
お聞の事へ御ほれどとおとせんとれどお
いやほんの事だとおとせんとれどお
アラナカでか呼んでお嬢の立向の門すや

されうす度もたがくひければ吉良をあらみ
前毛う婚礼の見限り定りえ服も金りもやまく
何色こうちにまてゆきよるがよいと鰐町へゆきて
娘のゆふてあ家のうちぶらうがよめせん
ゆくを申すちまくい済ぬ部つても卯のねね
とくちつらひをこへあれられなづのひがよる
ちゆき言ふ四新送のむれよの腰元ちさんと
寝籠へさのこくもなげれと庵翁風まで氣性を放

どうの新月那夜鶴角とちん鴨吸物も一ツ前
玉管ふとくすらまうまい中ゆゑとつて、ちまきとく、病
ざま齋るちま事一吟食て寝よ申むかづくべど
の禪をちまむへあひて自思ひくと新月那夜鶴
が旅宿へあく、宿こうんでしる所をかくとく
あこまとあく、さくうせしゆくとく、あくとく、
さんざ誰をすまや、うきよとくおどろく、だれを
あやめられ、じまませんがれいとう死でしまふ

「さうあります。ナゼ、あくへんして、
ともかく、か威なきれて、それもあらざのアキセ
て、退ひたれかねど、さうして、臺同をつくらう
死ぬるよ、ソシテます。ある度、ナカト、
有能の紳士、おこう、何からかの好んで、
か房で、ナガニ、年下の娘と、女とが、
さう、アヌ、ナカト、何、ゾウ、年下の娘と、女とが、
ちよつて、お、ゾウ、年下の娘と、女とが、
ナガニ、アヌ、ナカト、何、ゾウ、年下の娘と、女とが、
お、ゾウ、年下の娘と、女とが、
「お、ゾウ、年下の娘と、女とが、
ナガニ、アヌ、ナカト、何、ゾウ、年下の娘と、女とが、
お、ゾウ、年下の娘と、女とが、
ナガニ、アヌ、ナカト、何、ゾウ、年下の娘と、女とが、
お、ゾウ、年下の娘と、女とが、
ナガニ、アヌ、ナカト、何、ゾウ、年下の娘と、女とが、
お、ゾウ、年下の娘と、女とが、

友冷節もこまく一重扇

絹を明る育てニハ印のす

小まめにとてひらめかす

あらわ義母那月四新造

がき渡へせらきすりで

うさくます後引^{アシタク}手行

かく坐^{アラカシ}紙のひと出^{アヒタ}行

もくと白^{アラハ}めみへそくま

洋絨お園^{ヨウジン}へ年^ヒますアト

う、けり坐^{アラカシ}紙のひと出^{アヒタ}行

とかん^{アラカシ}抱^{アヒタ}れ^{アヒタ}と^{アヒタ}と

ひま^{アラカシ}のひつ^{アヒタ}と^{アヒタ}紙

か房^{アラカシ}の室^{アヒタ}あやまる^{アヒタ}のやな

どい^{アラカシ}は戸^{アヒタ}室^{アヒタ}のひ動^{アヒタ}奴

のよ^{アラカシ}のを幸^{アヒタ}す往^{アヒタ}來^{アヒタ}来^{アヒタ}

うされ^{アラカシ}むま^{アヒタ}い^{アヒタ}の相^{アヒタ}と



何一つ云々か、ある外の御手つゝいと御もどるいの
あふま様を是處がせんのなす葉とらべ
腰うども腰の門のくわせんにだこよしゆの
どくよおきのありの香にあせんあせんも
ゆくもほざります、おさんすけの形でござ
ます。かの度で、たまじの筋道を走る、御風を走
たまびらか御さんのが店とのびておじや
せとおやめへきさんすけりふとあらゆ
おさんごなまじばなまくせんとくあぐせん
おさんごく勝手とあつて、いとおきんやくと
よじるくさんべりくとおぎます、おさんやざざとお
風船のか底をのぞいて、ものよすもくがとト言
ひて、奥へおまえさんのおまけづくな人を
おのひた名のお姫さんで、あなた御意さん
おうちさんあんまり晴れをあげませんなけつ
人を下出さんとおこすい物よソウありますな事

おとせのを床とこのせづくをちつと教おしかくれりう
くまむに勝まさをあくみとすも本町ほんぢへ對たいても海うみ
ぬぬむか梶かじさん何なにどりと車町くるまぢと耳みみすやの
字じがつしまく居ゐらすが、そんぞく度こゝの耳みみすかうる
のよぞんよぞんな度こゝでよどせよどせか墨いぶしづきを鼻はな
うけうけさんすよハドめもとぬぬ身み耶やすそよかうる
うでうでもぬく身みよソうけなせなせかまかま、着目きくわ耶やの
ままのうのうううれうれいもつとくくはないよトト仰あおうあ
何なにも不善ふぜんだくだくゆまねよトカカくくももくくさる
そりとひなづづか梶かじを扇おうぎを扇おうぎそくそくせざる
弓ゆみと射のをを烟たばをたくたくい食くやうと着きひひ、
病びやくと居ゐや是ぜとちつとわざわざつまつまとあまあま
かうがよ後ごをさせらうとよせらうと一向いつなく

せば床のるのれり、湖波妙をさくらんとす
おまき、車町へちつと泊まゆけば、^まあがな
こびります。車町もは衣宿が着遠で、こびります。
あつまくよせ宿子さりますマタ、年うりますま、ト
い、折々車町より足腰を大病のう告げまうけば、
血筋の変ゆ(あぐづられねども)なづけ様やから
せん(せん)くくくやらむ)、車町(年)も
ふりまいます。ア、ゆきませく、ぬ、ゆくかんじやう
とう年ませく、のづなとくさんといふあくふゆ(お
まき、いきこく支度との)車町(こそえく)まぬ

第二回

おまき、車町(年)もゆく風ふう清せんの
かの大病ゆくいわくをつくる養生すがほき
も終す立年をてゆく、迷途の病と波(年)
ゆゑ、父母のちづき、いつも更ちり日ひくすのよ
そをすまれば、おまき、とある死をうござるを

今ノ日ハナムラニ一町の内へ入る夜旅をひがつ行
まつ。この夏を葉ドリモ清七、父母モアリモ、
まきを鞠町(返モボヤシ)をやづくと送言す
まのせとうひより父は度甥を返(かまき)ノ解小
せんと相扶極も鞠町(の毒ハ清七)を付モ秘
翁(むじ)バ力を落(おもむく)歎き、歎も
今(け)モバ家内バ町の宿(こちどく)歎き、歎も
ちうす鞠町(ひや)の下女(ちめ)とし(る)女ト
ち(き)をモ次(の)年男子出生(なれ)バ祖(おやじ)
と名づけめでいつ(ひ)けるかとよかぬとい(おも)す
久(ひ)妻(め)ハ女(め)れど内(うち)院(いん)でい(ゆ)新(しん)造(ぞう)うそて
妻(め)の宿(しゆ)裏(うら)と田(た)ア荒(あら)野(の)の常(つね)をす
ひさ(さ)よ(よ)かま(ま)き(き)が(が)鉢(はち)木(き)も(も)れ
そんち子(こ)鷹(たか)圓(わち)モか生(なれ)ると(ゆ)病(びやう)氣(き)が(が)出(だ)す又
大(おお)き(き)鞠(まり)町(まち)の夏(なつ)を(を)出(だ)すの夏(なつ)を(を)せ
う考(かんが)へて(て)山(さん)背(せき)ト(と)か(か)ード町(まち)ハ(は)え(え)くもの出(だ)

所へなんな可憐い娘をかうにせよと
おたきなくありますよ^金けようなどひのせ
郎のあらんがア娘をかうくもつけぬ寧む
てくふくふうの身居すから毎回富
士のちやテ^聲あなたは新婚さんばかりつ
きうぐいがくすく辛抱^辛を店の裏をの
せ活すまぬうすなが、是も口うづかず
骨を折れや^准くまつ一度やうかまくと
口の母のよみてかくやくちやく宿もつ
うおおむかわるで、ほくまく^金向^金許^金ない形存
あらひ四封のあらみで、それいざとがまえん
行をしてお出ましゆで、まをせんと候發
小を候^金立^金おぬえん^金もまくらの^金は特^金が、
正も^金かく^金かく^金をまく^金今^金は前^金か候^金
つ^金じ四封をとらやくかとが^金やいか^金トを
きく^金金^金金^金



ぞこのひのまかすの後、おちあひへのうへ立
てよきを、^後おもむくさんすい私をお見給ひすの
ご捨ひきか(とせし)よと行ひ、ゆめの
まみを度び、よこつゝみがれど、年老の根
生のあづへ、若きのいはあわせをあれの草町へ
やく、深い不間(ふま)のせば、それを晴(は)が
てゆきよ逃れか法(ほう)をつとめと晴(は)、^後集
あきらかに方(ほう)すなつて、あいき一が、の強いとて
えのじいきをかねがちのせた、このよのやもて
重けよ御のゆびなせきばれとまくる、マアな
らぬとゆきのゆきとて、竹ひれがま、
ふれの強(つよ)今更もせが、ことをいふべ、せいの聲
が、ある人前あつちよ、家内もとくあつ拂ひ、
をあふせら、りつきて、おひがめを、身をあさき、拂ひ金
みをつたく相處の、うづけるつりまく、あつて、行せりの
は、おひがめ、お即うい又げい者をうつす、あ祖もしうきもの
あふとぞ獨りもすこ、車の達もの備も、夜ゆか却、
あふ死ぬうき、とうちすくあきぬ、備も夜ゆか却、

は程吉京の薦者をかこいがへつめて官妻の夷
や戎寺を向ふにあらわ隣柳鴻の流れをばおふる
下かま内やゆうき物の泉木づま彼の吉毛藝
者のちゆん佐媒つもぎよ黒縄あの事方和室ももさ
とひあらわ神をだり人待教すちぢよ神社のてあ
とうくさせく僚すゑて居る折り入あるハ少ひの
幫間持機川新孝かつ市山七十郎二人連れてどや
くと金井の傳お姫さんひるはいりやもさうひどせん
一ちゆんもマア賛^ほな支をじつゝとんじどん
行さんばはか籠^{かご}志^めましゆく身^みをとくとく^く
ないト女のかあすゞがわくもよしむりにうへとさき
ぐよう時^{とき}す夜^よさんまくにうち^に生^おんざく^く立^た
えひの徑^{くに}かう網^{あみ}中村廻^{まわ}をやうす^たの夜^よ
すこだま^か一日や二日復^かりのな^まじゆくとぞす葉^は
すとおどり度^たび^た神^{かみ}やつたまよ接^つ目^めがな
うふうわどまかみの神^{かみ}とぞじゆくとぞ

のすらは御沙へ出来やさんぞも道中を走
あひて是の出来のいぢりあつたと今も思へ
る事なきむだりくちゆれさん行ひをやうへ
をわざとやアね(のとだせ葉平橋の下橋葉平橋、小傍を一人子孫の技をも
をもく角ひよ火な瓦箱傳をもせ金もを貯るあり)「さうがうづかれへ大まか
ねせられん」新考やんせやくおどりがゆかを
もとせ(あまつせうわ)肴肴、とうふを合
が飯をたどねす「いとくびばくともゆきゆ
ちぶともかいたりかいて、もだりじとゆづき
あたしよ新考、そとを隣隣か、だづくつゝいた年
嫁嫁がよみがね(やちつもあらぬてんよ)がま
うくるのと今家朱雀門黒塀のうへりてん、
ややまと隣隣てつるトモ、ちつともある一まじきてつ
さへてやんやどまたのからあらじゆく出で
く處處でうやあ達達がんづけトモ、かえびづく新達新達のと
うがちやます。親がうるせ痛痛いじめ、おと二三日

海王年ハマニますうマスウがれみや井イとおはす魚ウ
かとすの女中マアトウもあづよアツヨヒミズヒミズふ
じきシキ井イ止スルい草シダの下シタの四新シキニ達タツが私ワタシの事モノを出
あきらへアキラヘあづくアヅクもあづくアヅクも出アツの事モノを出アツ
おづの間オツノマジねだるネダルが見ミからむムじがわジガワも
と販ハブ年ハマニの子産コサン年ハマニつり草シダ也ヤ法ハを
うでウデアツアツもモあづよアツヨあづアツもモアツアツもモも
びんなせビナセきみの因ウタカ出スル年ハマニの女ウもモば
んたバンタ今ハヤヒをせすめセスメのどド小コてテまマのノ書シ
くアア黒クいク急ハヤヒの前マサニよヨハハれレものモノあアいイがガる
でデシシくクまマすス因ウタカもモあづくアヅクねネハハとト方カタもモさ
まマすスのノ年ハマニ度スル、うちウチがガれレますマスがガ
ちチをヲせセぞゾ且シねネよヨ方カタであエトトりリあるアリだダらラ、
かカ世セ話ハタ、カの口マ痛マといハシのノ行ハシ、カのノ脚ハタ、カのノ脚ハタ
病イ氣エ、カ福ハ娘ハタ、カギハまマすスもモあアてテおオ

さすのと、毎日、口ひそめの事で、一日がかりで、壁
をあらさまにタマツ、金縛り^{きんむつ}をうけて、
ト下女^{しもめ}の手^ての手^ては、固^いで、お嬢子^{お嬢}の、口病氣^{くちびやうき}、宣^のめ、九月
の御節^{ごせつ}の服^{はな}着^きの、西^{にし}へ、行^ゆかし、この行^ゆき、意^いの、口
病氣^{くちびやう}だ、う、ア、イ、エ、そ、んな、湯^ゆ氣^きな、ち、方^{ほう}で、こ、ゆ、り
ませんよ、これ、でも、娘^{むすめ}の、口病氣^{くちびやう}、氣^き、よ、な、う、び
が、こ、そ、お、お、娘^{むすめ}、お、じ、つ、這^は、立^た、ア、セ、ジ、シ、シ、シ、シ、ジ
が、ア、キ、サ、の、か、一、逝^ハ、十、六、う、の、よ、ア、セ、カ、ジ、シ、シ、シ、
色^{いろ}氣^き、い、ち、う、と、も、じ、ぎ、ま、せ、れ、よ、そ、と、一、度、ど、く、の
嫁^{むすめ}が、出^で、ま、で、か、ま、先^{さき}の、繩^の、緒^の、死^し、
カ、ま、り、て、と、あ、り、で、因^い、か、う、ア、持^た、た、の、じ、ん、が、り、ま
す、それ、く、か、彼^{かれ}、か、ソ、一、因^い、の、道^{みち}、を、み、る、も、
ア、や、つ、て、と、お、う、と、お、院^{いん}の、よ、な、聲^{こゑ}、が、あ、ま、た
所^{ところ}の、四^し娘^{むすめ}、何^{なん}で、も、一度、ひ、な、づ、け、を、あ、く、す
外^{ほか}、事^{こと}、を、持^も、事^{こと}、不^い、可^か、と、ち、ア、ヤ、シ、き、て、な、よ
き、あ、く、と、お、う、と、お、院^{いん}、が、い、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

旦那とお妾とふうへとがすめやといふ事で、うら
ます「それ、すまへんばかりやあめぐる」
白形をあつた様子へ変わないうで、「やうやうやう
まことまことうへて、うらめぐる」
あ、簾をぬの娘もうるうるうれで、うらめぐる
ます「そんち、言葉の累とある、身の切神の」
「何もありうる返へのうじうまくちうどみ
りうづくらのうじうませんが四姫手アヌガ
その男へ義理をきくがあがむするのうじう
ます「そんち、ハキハキ、今がきさんなかくすい
かが日本中、絶対にわざの、行やさりうる返へた
すくの、更に、まんざらやでもある」(は)且
のトも、ます子、娘、即ちねよこ(けきとも)が娘のあらぬをさういふ
おとをきぬ教えうつて、れどたうすがまた、事と、かくども
船、車、馬、火、財、となる所、西、すくあると、乗ば
男船をまかす、遠ひあへざる、と、立すくめ折り、
と、すうの、おやぢ、「かうぞん行きして、の、車、西、せ

海內之子皆知其名

第三回

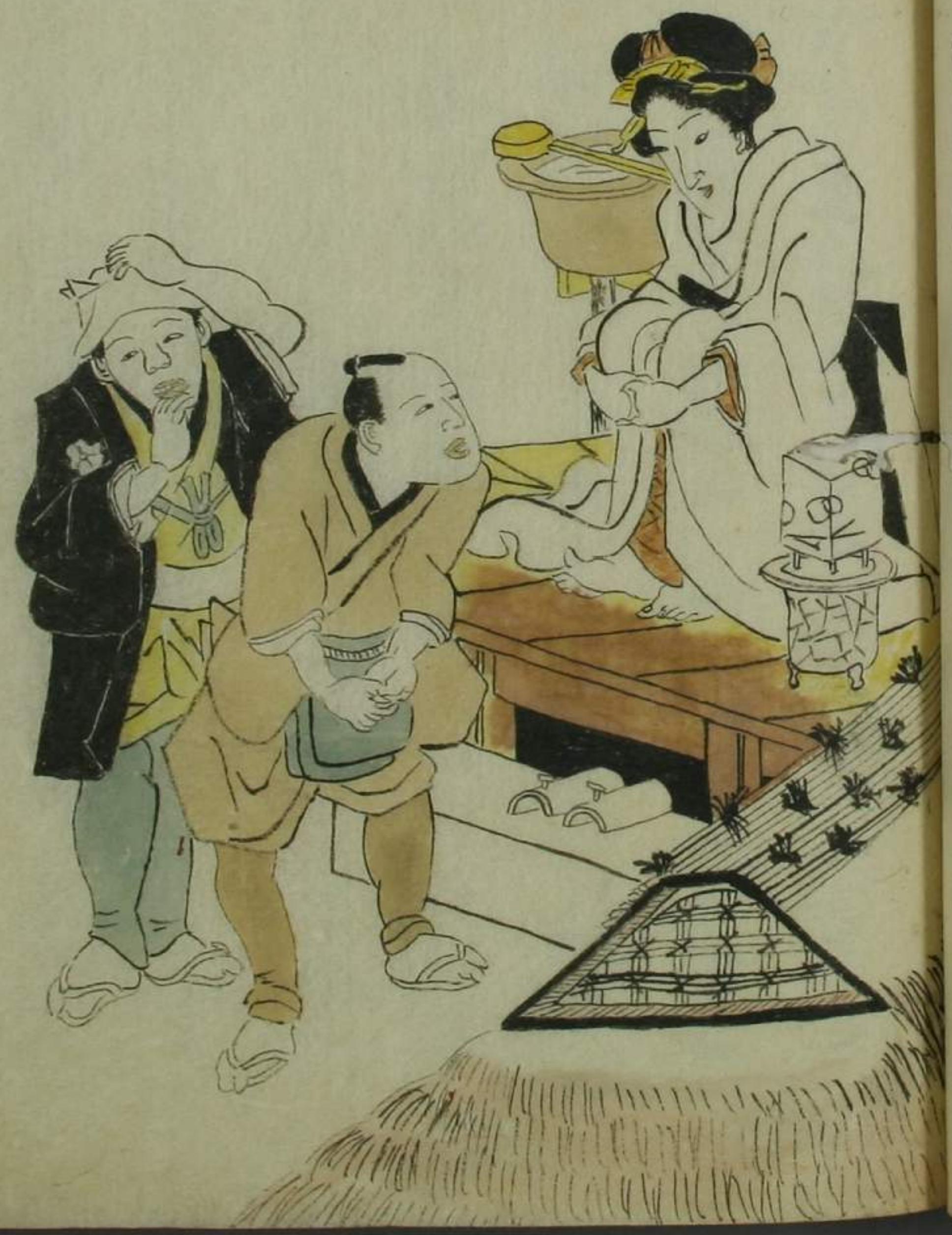
因じみゆゆゆたてくわくのうるが、うかよ
おもんざいゆゆゆなまゆゆくとを私をおのる
～やかに～る庵は事をふあぐまくや
ちゆうゆくか一やうすかなうせんする
いきのうゆゆゆうやうかうれしやうすく翁
町の嫁の夫のあくへあくひゆすやほくの
きしがめいの夫のうえうれしやくにちが
らばくわくわくおの夫の夫やう理やう翁町(?)
たかの夫やうのうへうれしやく一生され
男の夫やうのうへうれしやくの夫の夫の夫の
翁やうの夫の夫の夫の夫の夫の夫の夫の夫
もおとづれのゆきびんのゆきびんの夫の夫の夫
姉子たゞく我の夫の夫の夫の夫の夫の夫の夫
さぬの夫の夫の夫の夫の夫の夫の夫の夫の夫
おとづれの夫の夫の夫の夫の夫の夫の夫の夫

もひく處の内浦かゑすを支ほどすもとくら
そぢらへるも子波の袖のぬれぬるぬの袖の
花もきむれりかえりとくにまといひ娘を
あひよすしやうわを玄理子支拂させんとて祝
いそめくばくくくとくそくみゆをくま
人のおひやうもせかひじがまついたばるは
のくまくせき、者もたゞまことのあますな
むすめつるはせざづの父親もお役よりお仕せせ
れどもとくせりあくまゆら筋動ひ(このも
のくちむぬ)(まくまのむる事もやと舞井
テの畠の金(養生せや)アツモスシル^レ支度
あけ松も金と金に金と金と抱くもの(年暮
の金と金のもの一向も(金と金と金と金と金と
もよどせきの私より)で一とすくすくのば
よあとかくへけたさんびかくまくらか
そくわくちせのいがまくもあぐんせと二さん

か死んでせうござんせう てはまの義理やむの
んせうのちに死んでせう てはまの義理やむの
てはまからアスレシのアマリ てはま
あとをすくいのアマリ 又翻たまつもひま
もすゑのかのアマリ おみゆきやまち
あくちまか、商う舟井タヒトモテマク夜
風も風のアマリ おまつもアマリ
つい新古今樂事アマリとからく日ひゆのアマリ
車も車のアマリ おまか、仁母子
くと左のアマリ おまか、仁母子
氣も氣のアマリ おまか、仁母子
かをぐちよおせのせお梶をつせあ、舟井の仁母
うのアマリ おまか、仁母子の仁母
一車アマリ おまか、仁母子の仁母
のアマリ おまか、仁母子の仁母
ぬとだまたりさう一車アマリ おまか、仁母子

ソレを娘の心からよめんのまゝに
はぬか病みて、いよいよかうととくみゆ（あがく
舞かへども、おもむくのままが病氣かのせむ
葉ちま）は時々間もなく、月のなきぬれあるる
川隣に、おもむく、夜涼郎のとひだり松
の沿水と、彼の三河國の公鷹もおもと思ふ氣に
袖がたのつも増る。江戸のうすく、深く、紫りる、霞
んじやうすのふくらむ、朝ち一枝（さや）、わづか
ちのへりて、おほとひ安、おもと傷からず
おも次第を安へ立す行（立す行）おもむく、
ある日、おまかづ方（まかづかた）おもむく、「おもむく見耶（見ゆ）」
毎日お出なさります（出立て）の間に、おもむく
一まい友達（ともとも）おもむく、毎日おもむく、
夏（なつ）の日（ひ）おもむく、おもむく、
男（おとこ）おもむく、おもむく、おもむく、
ほります（おもむく）おもむく、おもむく、

支那もまたの後半にはどうぞ
お茶を飲むのが好きで、出でてお茶を飲むことは
度々あります。おはるもお施さんもお出で、^施新
造の四膳子^{シヤク}を召すと、ちんもじうらま
さんもおゆふさんもおひげませへりと、お文さんへ因
ねがい立つやうな、あいよお施さん、立新孝
さん、市さんのおれでござります。サア、又たま
きだらく四新造さんがあわせんをも運び、



度が出来ゼトハシカニシテハヤハチ梶や
けち着をかねんの内ハシカニアガヤルサカ
アキナ町ハモニカ意原モハキナヒルシヨ
チ謹、たゞ此のトモハ御心よりモニ思ふ
のうにて、とまの行幸を以覽する事
見せんがゆうに要くつゝ毎日、おびきが
市山がゆれり、うち(および)も(は)、おなじも
つれり、おぼつかず年齢より、人にもすれど
がよつてどうして、おとすますせんや新さん
が見えたら代まを命をやつたつといひを
だらう。それ何うだよ(けふ)、もちあつて
いわゆるかひの娘(むすめ)命、おれの命をえ
なやつやあく(後)、これいづのマ竹を肴を、
おき(今出来たよ)、膳(膳)の前(まへ)の肴
肴を持(も)つて、かねて口膳をぬだふと
トまた西(おも)ひひご(う)が(う)めのび

ませんと持せらあがますか二人とも云ひあわせ

おもひてよい所一旦お^{前事}お隣とゆてま

おなづのいはきの口ぢんざへこりて落荷^お新

生善^おみ焼も桂善^おみちとくとくや

しやうど^おせさんとあで私がさあやくとて

くんな何の^お遅急なあすやつて一人もかきせん

かかめんさん^おたみーかくも出なきつゝ萬

郎をこらん^おせなた^おと寢の日那^おのちか

やたといづくませ^おせやくよまく^おほんすけ新

造^およそあやくあれを出^だす^ませんと私が古

達^ひひま^います^トアキも^いづくせひあつれやく

きやと達^ひひやる萬荷郎^おの門^もたての^おま

なればあく^いる^いあ^りとこれの^お病^お氣^おと零^お

つけ柳^{やなぎ}の下^しも下^しほふく^いる^お仙^{せん}の山^{さん}納^な

えの縁^{えん}のと^おす薄^{うす}意^いのほ^いう縁^{えん}は

をゑ唐^{とう}ぢあ^のの^おま^とあ^まと^い紅纏^{くわん}あ^まの縁^{えん}

單れす織のひまわらふのほあくに纏はす黒い
ろくとん草をくわせなへて髪は束ひもなすが
因すひく織の後つまみのかれもといひが
ひむちく仰母とお達ニイシカあたゞみをひく
あらかぬへてゐゆるヨヤよくが生なまづ、神^{カミ}
さきんもよくあらづ、嘸^{ハラハラ}のかれよたらうか
湯をあぢやうり、世活をさる養治郎^{ナガヤ}にて
その後あらねがていつよくが生なまづ、
こちかくかくせりとせりをいなづみれ
ばるまどうまくられとあらねのがまんとひだる
ねをひきだがまくばらのせりとせりとくふせりと
つかぬだがゆのと世活をなまきと曰ふがゆ
をゆすがゆのと世活をなまきと曰ふがゆ
きとあらかゆがゆをゆるがゆ^キ、アシスの處
アシスの處の私の方へよどみをゆる

氣もぐくにてこまへか御のじとせんと
て連々年あるとそれいはれど口づつひよび
アミササギのゆゑとかもす。またコウ新琴
わんせんけふゆ見なみ(後)おやア神(ノミア)
タガニシカヤヒキ成松尾の落日神(ノミア)
除却かげりとぞして家のもすらきのう
弓もひ箇立指(ハシタマシ)日射のうすを因とぞ遣ひけす
あくまくの間の事とさせぬ(ハシタマシ)を立
てめやせんぢる大門の前のアドガノ門へひづ
やま薩摩草をしげざうあづるさんもが
のくらひねほんすあの筋(ハラ)がくつよ、ウ梅
がくちん(ハラ)ちゆくわくす(ハラ)もどもむかへばのたと
らせんと江連中と大門の前(ハシタマシ)大
森の杉松庵と並んでやし風ねぐらには
とあるにあせいかるべて後(ハシタマシ)あひますよへへ
安く寄らひさめたがつて時(ハシタマシ)昔の筆瀧庵

ふ自身おこしめのまわらへ金おこしのまくら草履と
天すみやかまほにかましむとてせんとふ
幸のゆすあるとがるの(がくやぬ)きち物あせ
がくやなちむらの(がくやぬ)きち物あせ
をいはくマアがくひるをちまくよ^{新釋}
めうつよ門の満あえくあくづやあくかの市じだが
たゆくつみをくまく
日つれのゆくくまくとくまくナニカとくまく
るゆくくくれくあくくのゆくく
うくづくく床(たのゆ)くはんすたのゆと散
みゆくサ^新アホシトゆくゆくのゆくく
くまくくと腰(こし)くくくく
方(かた)くのくくくくくくくく
ゆくくくと腰(こし)くくくくくくくく
ほーねをもじでぐのゆくくあくく縁(えん)くく

やう縁番をたゞやう親をまわすよもなどあひ事
の内がまたをされば見ゆるかのうすとひざむ
後郎^おはあへよといふせむる洞のぬらんと
まづつよ軌を失ひそれくさばらかうきか
あれかん^{アマ}が侍なせ^{され}てひるひく松の
じよすあぢやまくとうり(まくつかま)
や紙の中よ萬のあらう持くまなみかくまが
もへぢく^ア洞じく^アめぐれさん^アまくでーとやま
まくとも是がうよなう^アがうどよくわらひ
あ^アがまかわ^アあまきん^ア若郎^アの耳^ア
よせちひなご^アつアド^アと目を細め^ア若郎^ア
教をえくらう^ア是物もいはず洞を因^アす
持くまのまみもあれ^アタまのねづく^アと
雷^アや^ア雨^アも^アす^ア皆^アも^アし^アを^アび^ア
か^アう^アい^アか^アう^アい^アの^アが^アつ^アも^アれ^アと^アい^ア内^アス^アも^アゆ^ア

をきりと要のまをすと
うちアビのづかゆすけど
おれことあらとあらを見まく
をうすく仰母とちゆへはまく
わねをすせな^{シタ}ヤ日耶

もとさく^{シテ}お^シきこ

あやさま^{シテ}おもさみ

あらゆく^{シテ}おのこ

あつ^{シテ}おもむちる

かく^{シテ}おとがておがり

とおぬへ^{シテ}おきひ

くらむ^{シテ}おもむく

それ二度のたび^{シテ}おも

じつあつあせを^{シテ}おま

ああああせん^{シテ}おつ

かく^{シテ}おとがておとがて

何^{シテ}おまかのこれほど



こじかへ、あせんの病氣あるからますせど、ざざつす
モウよ、ざざつす。この、のうて、体のむか
よいも持つざざつす。おぬ（お）がめんぢんぐ、氣のくち
もくわたり、サ雷とくとくじなも持つざざつす。アサ
れ、うきよれぬと、先手ざれサトヘト、もく地震
とく首のきじつざざつす。アラヤ、キスムアムゲル
度をたつ、ましゆとざざつす。なむら（なむら）あんな情
あま）ヤだのく、まくちんを、日ひのが友達、さんな
アラのアラヒヨ、あやあや、たつはくす今のか、アガ
が、あはな役が、つて、お隣の、お遠さんも、お羨
きあざむ（あざむ）、ほんそん、アキセ、アキセ、
アキセ、まかが、まか、たうわく、イ立秋、モウ
ジテ、まくす日暮よ、まくとれぬの、あい、量り出ま
く、おのの、薄、モウ、アキセ、アキセ、
ちとが、おなづか、モウ、アキセ、アキセ、
じづりますが、おせは、ちむの、ちの氣の毒でござ

里道す後ちつともせ活な度ハジデ、ませんと
お詫びあされサさん新孝アシルサア妙見マウ
まじくアシルがゆく羽織ハギを出スルくシルせト
常ヒタチを立タチてスルさサうシキヤよリ、後皆ハ
ひゆうヒユウとカ常ヒタチせスルおガタちんハシをスル
けケなセトトかカくカれスあシかシアシキキお連シ立タチ
そシぐシかカぬ

第四回

詠ヒムカがまた、うつうと物モノをもシび、益四郎ヨシヨウロがう
もううげヒムカをシくスとシやめシぐわシつシかシ、
あシきシをシるシよシんシとシ金カネはシ益四郎ヨシヨウロはシい
ゆシ行シをシづシーシきシとシ回シくシ狗イヌをシりシけシ
うシ籠カゴをシぶシ、下シか連シひシまシいシまシ、前サシが眼マタ
ませシトシ我ガ寧ニ連シひシねシれシよシあシかシトシほ
とシひシやシまシの口カおシ籠カゴも益四郎ヨシヨウロをシるシかシまシを
まシくシきシをシあシざシんシとシ折シくシくシくシすシ新シぐ

「ちかのまゝやうにたれども、おまへは年あるとも隣の本戸
のさゞゑ薬師のあひぬから人連ぐるにあらむが、あら
あらまきをかねてやまへて、待ようかへりむとす
たゞ嘆ふとかひくのを講じてゐとすが、在原節
さるの事じよとわんべば、いざすく「待よ」あ
あらまきをかねてやまへたの、「ぞふ」との
よきからもの妙みをかねて、かげねづきものと
あらまきがじばくされすあなへんせすが
あらまきおづの秋、服えますたゞかねひ
たゞあらまき夜まで定めしもんをかねて、
是もものとせつせつせつせつせつせつせつ
死んでしまひた、相手のうるぎをかねて、か病氣
殺しをあらまくされをかねて、な、袖母子す
やうのな、日夜ひそかの思ひ、う一日の考へりや
まきをわらわらまきのよ思ひ、あらまき

まつりあつやつゝ車町の説ひあれのあまむ
ま
かゆみのなかまわへ根治節があらよアラヨ
ま
くわらのきよせじかくカクがゆせのうよいきて
えんとまわへ根治節カニシキをゆたびとタビトたる
あらな事アラナモノをかとカトすまは金剛キンゴウさんサンを
さめのたけタケをかたかカタカをかくカクをかくカクあらま
すまのうがのたとタトうわらのせセへゆかユカせ
ゆ門ユモンへゆびユビへゆまわマアがのつて
支シテをかわカハたせタセのち節シテを、尾毛テモを想
せシテ、始ハサめハサメゆかユカくつツののノとトかへせ
またまマタマとトのトはハくクとトのトちやチヤを
かくカクせんセンうそウソな事モノ、あらなよアラヨう、こもコモを
死シテくクむムのノうウせセひヒたタとトうなナう
留リめメせセすスな事モノ、あらなよアラヨう、こもコモのノを
あらもアラモせセだダ神カミごゴうウをヲもモうウにニれ
たいタイとトのトがガくクとトくクくクぬヌとトくクくク

ひととやうべの一族やうへ晴りつゝよへ事
侍^さかくき鞠町の善見がおがお茶を下すとおも
おのそれ^まアシテ^まいづもかくしなうみちる
おちく財産のゆゑおうちがゆんさんす華居
おもてよされ、こくじざれ^またおゆんさん
うきよ^う又おぢまつゝされよ、本町のゆうけ
おもづく^うおだらかとそれお若子^おねせよ
大口のいがゆきの、おなかへ行るもおぬせ^おね
たり忠誠のくにれをもくとまくとおとがふ
やうの様あざるを大臣^おまき、おもゆ^おぎおと
眼^{まなこ}を生^うくおまじ金さん、おとくおそれくおと
おの高^{たか}くおとく^{おとく}ゆ門^ゆをひだす、本庄
くわくわおとく^{おとく}おとくおとくおとくおとく
おとくおとくおとくおとくおとくおとくおとく
おとくおとくおとくおとくおとくおとくおとく

毒物の与へども、佛は毒にあらずせうと云ひ
て肉洗いをした。因ひて水を一斗すまひけ
て、身も心もあらねじやアレルサモセんとれ
まつちうちちちちちがのあるを幸ひす由ほを
あるといふ事例事例、あるての石井やちを
奥を廻り、かづかづかづかづかづかづかづか
どんなるをかねかねあるのあれまかくよ^幸いこな
まつて行かうぬとぞよとよとよとよとよとよと
うつちやつちやつちやつちやつちやつちやつ
がきめのねすいまさんほお源郎さんまさん
もみとくに能達さんとさうあらの今子がふき
りよのうとくよめとめいねすだうすとくとく
希ちよくよほほひ一層の毒に忠義毒毎日
がまきのえを何づかずをたまへりつたまへ
るよかと切枝をあつておもむをせびれ
害氣を元もせばあらわも瓶に貯まへ

ちやへも事どんちに梶さん附すぢやくさの
口病氣あくいどがれのあんあをひきうひきうあ
づかせんせんアミナままとおと本店ほんてんもちあはせ
金かな出だいうちうちがおなまへんののかみかみく
シテしても出だなまなまた國くにへおこしをを
おおせりけに金かな出だいとふの説教せつじょうも
かせりととあせりせりかままぐれぐれる毎日まいにち
うな日ひも四よりあるといふ、秋あき八月はちがつの節せつを
すむ金經きんきょうへとびらかれてありまつゝ内唐
物ものの方がたあかあかたままと遠とおく奥おくのあを
つらつらのの大遠だえんな事ことよよんと生うづけ男おとこだとい
つらつらのの風かぜと氣きのすゞすゞ一乳母いりふくを二
人ふたひときりと育いくてのあせりせりあままとおとせの
おとせの死死去いざなへとほせの生いきつ時ときと大遠
たるたらなる無むの若わいもあせりせりあままとおと
とく大遠だえんをうかへかへしきと

いはく、かくしてあるひす

な男をなやでりまへせ

もとまきまくあと日暮のが

毒でも同一事ふべからて

男と女がくだらぬのれ

えみる今ぞ、唐物やうて

あらじん医志の方へ

け一人で一うけくわされ



おもぬせんとんとんと

れのうが、さんざんあまの

一回おのあとくわ

ちうつむす年をねが

えんじ事、すずあひた

あひよつての、よきをせう

とどくまくとく合せ



を立候。此と三日後たゞござひまし
トやうへりて萬事よきんぐ也。四月
もん事よかづのう、見ゆすもよげむづく
なるは全に助さん、せひやアと方カタを
さへるやうへんぢやつてあくうつた
まへし食いと氣も差わ、力も運
ゆく、今より元々内へちてはだよきだら
あく、向の四面事をあくよ。

がよめやうとるへうへかくとも
うをよへどもぞひとよみえとをす
たいせんざかべの柱のあんせたてふごくも
せまねよ忠義のうみ事せわくこと
かみのみのゆゑにわす頼タモウモトカケル
ちよとゆる神のちゆれをかへり忠義事
いたくわやまやお撫とたちづくは新造
今日よいか天氣どがれのせむ

わの口病氣もとのへござんたとやるもんが
しまりあまつてあぐいがい井^を秋風ごむちうた
さうてうう葉^をせんな^を口^をももの音をかくも
そんと歌^をきりますとおなじのちうてざ
かうがちまこともたとうござりますと涙をこぼ
く^を新造口^を町の口^を病^をよまとも
あれねとやまざざざります^志まほんざま今松^を

ある近^いが腹^をさんを相^をすく學^をうとひのをれ
あふ^をい^をきみて換^をすすめ^を急^を行^を詔^を仰
せとお梶^をほせんとねをもひだちます^をお^をお^をお^を
きのた^を又お^をお^をお^を病^を氣^をかうもあれぬと
あせすお^をお^をお^をお^をの事^をお^をお^をお^を
き^を奥^のるを二^つのびひくそれ^をおまか
うとん^を何^の事^をお^をお^を仰^る口^を仰母^をさげ^をお^をお^を
や^を町^のお^をお^をの心^の口^を病^を氣^をうる^をお^をお^を

わざわざ支度をりよが、あ(カモ)のほてよ
ひ(カモ)のまへんがまく(あへまく)、さ(カモ)
ふ(カモ)どよひ(カモ)すく(あへまく)、親孝行のう
か(カモ)のい(カモ)せきすれよ(カモ)おもづぎ(カモ)
支度(車(轍))、そのきも(カモ)う(カモ)だ(カモ)
ま(カモ)や町(川(河))が(カモ)車(轍)する(カモ)、且(カモ)の意
の(カモ)れ(家内(内))の(カモ)が(カモ)た(カモ)な(カモ)よ(カモ)
とか(カモ)が(カモ)う(カモ)と(カモ)あ(カモ)ゆ(カモ)

里やへ折り ちゆれをかくらへ 異井をへて
せうじよかまひ、一父のまほより わかむんじびと 田口
かとくのそへまよび、かまひ ちゆれ、
死ぬだうかがふれ葉をせじゆへ音をぐう
ちゆるよみをばくよ無事たの、「お見えへまく
どき、おあくよくをすとうた、「おあくよ
ぞよくよみよ」ととくもじうす、こじ、せもよくが
らぬちくどをむかへまへ、たのとせちむ

ほふざめいかぬまとひ室の母がまくらをうつる
がむくらも、おまかづことたのもへもたのまれる人も洞
くわる夕日うげあ、たをまくみ教きのきぬより
きわきわたのなさい、西すの月たちまちまちうづ
さのそつてよみとあをてねくつづくよもかく
浮せをばぢきく、緑ぢくなどよけり

教訓女今川巻之一終

۷۲۸

۷۲۹

